

# 自由遊びの主張



堀 合 文 子

幼稚園教育をする上に一番大切で、幼児教育の干点であるこの自由遊びを、私たちはどのように考えて毎日の保育をしたらよいか、今、もう一度ふり返って考えてみよう。

## ○幼児の生活は遊びである

自由遊びは、考え方によつては、幼児の生活の中で軽い存在とも考えられるし、また、とても、重要な位置を占めるとも考えられる。『幼児の生活はすべて遊びである。遊びがすべてである。遊びの中にいろいろ経験し学び、かつ、成長していくのである。』これが幼児の生活の全貌で、あの幼児期に適切な指導をすることによつて将来への基盤とするので、私共はその幼児の全生活である遊びを尊重し、指導していくかなければならない。また、その適切な指導を

くふうし考慮しなければならない。

## ○自由遊びの重要性

未分化なるあの幼児期に、遊びをはなれて何が適切なよき指導ができるだろうか。今は自由に遊んでよい時間、今は先生の計画のもとに経験する時と分離して、時間を区切らないまでも教師が頭の中で分けて指導する。もちろん幼児は教師の命令により行動してくれるが、そこには従順はあるだろうがおそらく幼児の自発活動はみられないと思う。教師の指導のもとにうごき、幼児も教師の指揮、指導をまちかまえている。その幼児たちはその計画の遂行されている間は教師のテクニックにより興味も一時わき、あたかも喜々とし、立派に行動しているし、教師も立派な指導ができたと思うであろう

が、これが何年か続けられた結果、みた目は教師のいうなりの優等生に見えるが、活氣のない、自發性の乏しい、何か指導されないと活動のできない幼児ができてしまうのではないか。また、どこかにこのはけ口をみつけるであろう。幼児は遊びが課業なのである。おとの仕事に価するものが幼児にとって遊びである。

このように、幼児を幼児として遊びの中に生かし、生々と自由に活動させ、その中で適切な指導をし、将来の基礎をつくるには自由遊びを自由な遊び、計画された遊びと狭義に考えず広義の自由遊びとして考えてみたい。

### ○自由遊びの指導

遊びが幼児にとっていかに重要なかは前述したが、前述するまでもなく、心理学として一応我々は心得て、理論としてはよく知っているし理解もしている。しかしそれを自分の幼児に実際化した場合、正しい自由と、放縱とのこの紙一重をまがってしまう。また、この紙一重に苦労する。いかにして、幼児を幼児として生き生きと自由に、それでいて幼児が指導されている感をいだかしめないように指導することができるか。私共の常に望み、常に悩み、常に苦心するところである。

#### ①遊びの中へ計画を

幼児の生活は幼稚園の玄関へ一步ふみ入れた時より始まる。幼児の自発活動がじゅうぶんできる環境のととのえられた園庭、保育室

では登園と同時に幼児の生活、遊びの生活が始まる。ある者はままであるが、砂場、ある者はおえかき、ある者はブランコ、ある者はおにこっこなどなど。幼児の生活はこのように帰園まで次々と展開され、続く。

ある日は幼児の自発活動の表徴である自由遊びで一日中過ごすことがあるが、もちろん、これは教師のなまけでなくて教師のその日のある計画である。

「今日は手提の製作と、音楽、新らしい“えんそく”的歌を教える」この計画を教師は持っているとすると、登園来の幼児の生活は遊び、遊び、自由遊びである。教師も幼児の遊びをこわさぬようその遊びの仲間に入る。

その中、教師は遊びからそつとぬける。そつと。幼児が気がつかぬよう。幼児の遊びは統けられる。そして教師は、部屋で製作の用意をし、教師は幼児の一員としてその手提の製作をたのしそうに始める。近くの幼児は教師の行動に誘導され、私も私も、僕もしたい。私もつくる。僕もつくりたいと製作のグループが活動をはじめれる。教師はその製作を指導する。他のグループの幼児は、それぞれの遊びの場で、（砂場、ままごとなどなど）活動しているので、教師は製作の指導のみにとどめず、その指導の間をみては他の活動の場をみて、例えは砂場なら砂場でおこなわれている現在の行動について指導事項があれば、洋服をまくってあげるとか、水の使い方の指導をすることも指導する。

このように教師の計画が幼児の中に入れられ、製作のグループも、完成したもの、他の遊びから製作のグループに入ってくるなど自然に遊びの流れが続けられる。

また、お話を教師が計画したとする。

“さあお話をからいらっしゃい”と各々の幼児の遊びが絶頂に達してたのしい時でも、教師の一言に皆一室にあつめられ、両手を膝に行儀よく“さあ今日は何々のお話を聞いてあげますよ”との声に耳をかたむける。

これはお話を聞くという経験をさせるための、一つの方法だが、こ

れでは幼児の遊びを中断させて、教師の計画を遂行させたに過ぎない。遊びを中断した方がよい幼児の状態の場合ももちろんそれでも、また園全体の团体行動に参加する場合などは例外である。が、お話を、リズムのような場合も、教師に計画があれば、皆がお話を聞きくるよう、リズムをやりに集まるよう幼児の興味を誘導し、環境を設定しなければならぬ、その教師の技術を考えなければならない。例えば、今日はお話をしようと考えたならば、幼児の遊びの生活の中へ教師もとびこむ。絵本をひろげてみはじめる。また遊びを入れない幼児を誘って絵本をひろげてもよい。その中何人かの幼児が集まつてくるだろう。その絵本のみ方も、つまらなそうにたたべージをめくるのは幼児は幼児自身の遊びの方にずっと興味をみいだし、せつから誘導された人もまたもとの自分の遊びに帰ってしまうから、幼児自身の遊びからぬけてこちらへ集まるように絵本

をみていろグループをたのしいものに教師がしなければならない。おもしろそうに、たのしそうにみてると友だちと遊んでいる幼児も集まつてもくるし、のぞきにもくるし、来ないまでも自分の遊びをやめてこちらに注目するだろう。その時に、教師は、じゃあ、“今日は先生が（）のお話を聞いてあげましょう”と、教師でなく、お嬢のお姉さんなりおばさんにして、注目だけして“何だろう”と顔をこちらにむけている幼児を、“あなたもいらっしゃい”と声をかけると、よろこんでくる。そして教師はそこで椅子なりを幼児に運ばせお話の体形にととのえて始める。

この教師の誘導もしらない幼児、誘導にのらなく自分の遊びをたのしんでいる幼児、もいると思う。しらない幼児は教師の視界にいないのである。お友だちに“ききにこない”とよびにやつてもよい。それからのらない幼児は、余程自分の遊びがたのしく、打ちこんでいるのだから誘つてもよし、誘つてこなければまあよいだろう。このように幼児の遊びに教師がとびこみ、そして最後の形態においては同じだが、その過程に大きなかがいがあり、そこが大切であり、またむずかしい。リズムでも同じだとおもう。幼児が教師の計画へやってくるのを待っているのではなく、教師が幼児の方へかけていくわけである。

## ②遊びの中から計画を

教師が計画を立てても、幼児が興味も持たず、誘導もされない場合がある。また教師の計画よりはるかによい材料が幼児の遊びの中

にころがっている時がある。また幼児の遊びがそのまま経験内容に発展できる材料の時がある。幼児の遊びを幼児がどんどんと実現し教師にヒントを与えてくれる場合がある。

こんな時、教師は自分の計画はいさぎよくして、その幼児の遊びをより発展させ、より指導していかなければならなく、それが教師としてより理想でもある。

それには、教師は常に幼児の生活、遊びを常に観察し、その機会をつかんで発展させなければならない。例えば、ままごとでよく幼稚園ごっこをする。で、その幼稚園でリズムをしてあそぶ。こんな時をつかまえて、教師が一しょに生徒になつてもよいし、ピアノまたはレコードをかけてもよいが、そのようにしてリズムして遊ぶことによりそれを次第にリズムの正しいルートにのせていく。他のあそびの幼児は見にくるかもしれないし、"入れて"とくるかもしれない。人数により場所もひろげ、遊具は一時まとめておき、見にきている人を誘つたりして次第に組全体へ呼びかけたい。

このようにリズムばかりでなく、製作でもその他いろいろ、幼児の遊びから計画をみいだすことも必要で、幼児もより興味深くよりたのしく経験し参加することができる。

### ③遊びの中での指導と教師の位置

遊びが、教師の計画ともむすびついて大切な位置をしめることは以上のようにあるが、幼児の遊びそのものの中にも指導すべき機会は多々ある。遊びを通して友だとの遊びの指導、言語の指導、健

康方面的指導、観察方面と、教師が幼児の遊びの生活を共にする時、その人その人によりいろいろの機会がころがっている。  
教師はその機会を捉えその人なりの指導をそこでしなくてはならない。例えば、砂場あそびをしている。水の使い方、砂場する時は腕まくりする。砂場後の手洗、また、表現活動へのヒントなど、砂場一つでもいろいろ考えられる。

このことは、前述の計画との関係にも考えられることで、どちらにせよ、遊びを、自由遊びだからと教師が別こに考え、幼児を自由に遊はせるだけさせておくのではなく、常に幼児と共に遊び、教師がある時は幼児の年令に自分をさげて幼児のよき友だちとなり、ある時は幼児の指導者になり、ある時は母親の立場になり、ある時は姉のような立場にならなくてはならない。

「幼稚園の先生は幼児と遊べる人でなくてはならない」と幼稚園の先生になる第一条のように言われるものこのためである。  
教師の遊びがどんなに大切なことか。

### ④自由遊びと保育形態

以上のように、遊びが中心の保育となると、自ら形態も学校のような、時間割式はもちろん、区切をつける形態もなくなってくる。が、部屋の構造、周囲の環境、幼児の生活状態などにらみあわせ、その形態もいろいろと変化させることがより賢明であろう。しかし、遊びが先ず幼児期には第一のこととは忘れない。

### ⑤入園当初の遊びの指導および遊びの移行。自由遊びも広義に考え

てくると幼児の生活全体と関係があり、またそれが年令的にも大きい差がある。で今、入園当初のことと考えてみよう。

家庭から幼稚園という社会へとびこんできた幼児に、先ず考えなければならないことは、幼児をいかに遊ばせるか、また、いかに遊べるようにするかということである。年令によつてこれはあつかい方もまた期間も大分ちがうが、いずれにせよ、幼稚園になると共に、遊べるようになることが大きい問題である。

それには、遊具というものが大きい役割の一つをしてくれるが、それと同時に、教師がよく体を動かし、よく幼児の行動、気持を観察しながら、幼児と遊んであげることが大事である。幼児をあきさせないためには、教師がよくしゃべることもある時は必要だろう。

教師が一しょに遊んであげることにより、そこには自然と交友関係もおこるし、各自が、遊び方というのも覚える。また教師との精神的つながりも出来、お互に安定感を持つようになる。この教師との精神的つながりはとても大切で、教師が幼児と遊ぶことにより初めて生まれるもので、教師は教師、幼児は幼児、では真のつながりはとても望めない。

で、これこそ教育上、一番大切な事なのである。あばれん坊、その他問題のある幼児があるとすると、と先ずその幼児と特別よく遊び、特別親しくなりお互に安定感、信頼感を持つことが問題解決の鍵の一つとも考えられるのもここから出たことである。

このようにして教師と幼児との間にも安定感、信頼感ができれ

ば、今度は友だちと遊べるように教師がしむけることが次の問題だろう。いつまでも教師が遊びをリードしていると遊びを与えられないと遊べない無無力といおうか、そのような幼児ができ上る。それで教師は次に、友だち同志の遊びの仲介の役をするわけである。遊べない人も次第に仲間に入れてもらう。

このようにして教師の位置も次第に変えていくことにより前述の教師の計画を遊びの中に入れたり、また遊びから誘導したりすることが可能になってくる。教師を中心に、計画のためにあつめたり、散らしたりの生活をつづけていては、お互に安定感を持たず、遊び中の生活もできず、幼児の自発活動もおこらない。

ここでも大きくいって、先ず大いに幼児を遊ばせるのである。そしてから後につくる経験である。

×××

×××

以上のように自由遊びを考えしていくと、一面には理想としか考えられない点もあるが、幼児にとってこれ程、大切で、また必要である自由遊びを私共は一応この年令には、何はさておき考え、自分の受持幼児の状態、環境、部屋の構造など考えて、いかに遊びを尊重した生活をさせる事ができるかを研究し、考えなければならぬ。これこそ幼児の日々の生活を豊かにしたのしくし、将来への芽を正しくのばすことになるのだと思う。

自由感にみちた中に適切な指導がなされればそれは保育者の最大の満足であろう。